



動物園ではたらく

小宮輝之 著

2017年・イースト・プレス発行

価格（本体 880 円＋税）

評者 酪農学園大学教授 浅川満彦

本書著者が約 40 年間、動物園に勤務された中で出会った動物や人、そして、それにまつわる事件を経年的に披歴したエッセイである。そして、まず、題名から想像されるように動物園で働きたいと希望をしている学生には有益である。それもそのはずで、この本が「イースト新書 Q 仕事と生き方シリーズ」の中学教師、放送作家に続き企画されたものだからだ。このシリーズ自体、興味深いのだが、その 3 番目で動物園を持っていくこと自体、一般に極めて関心が高いことの証左なのである。

本文 4 つの各章題に「飼育係・飼育係長・飼育課長・園長」とあるが、それぞれの職階で具体的な職務内容が提示されているのではなく、当該職階時に著者が経験したトピックを徒然なるままに記載する方式なので、昇進するにつれ、動物と直に格闘する時間の劇的減少を予想した。現場作業と運営・管理とは見事なトレードオフの関係にあるからだ。ところが、これを裏切り、たとえ園長であってもこまめに現場に出ておられたらしいことが読み取れた。確かに、月間入園者数が旭山動物園に追い越され「敗者の弁」をマスコミから期待されたコメントを捻り出すよりは、遙かに愉快で、生産的であろう。ただ、園長がたびたび現場を訪れていたとしたら、飼育担当の皆さん、その都度、物凄い緊張感に苛まれたと想像されるが…。また、園長時代に東日本大震災も経験されていたが、その際、動物の挙動に関する記述は興味深く、大変貴重なものであった。もちろん、東北地方各園館に餌などの緊急物資の運送、被災施設からの動物の緊急受け入れに加え、帰宅難民と目される背広姿の来園者が上野動物園内にいつになく多く見られたなど、評者が実見したわけではないにもかかわらず、脳裏に鮮明に浮かんだ。

評者の（寄生虫病の）研究で関わった点で親和性が高く、それでいて本書で知り得たことが、下北半島産ニホンザルの飼育が上野で初めて飼育された事実である。この個体群が国の天然記念物に指定されているにも関わらずである。国内動物園であっても（や、だからこそ）、概して、国内の伝統的な家畜や地味な在来種飼育に対し冷淡である。しかし、ニホンザル以外にも、見島牛、口之島牛、木曾馬、ヤクシカ、ノウサギ、ニホンリス、（アズマあるいはコウベ）モグラなどを積極的に飼育し、著者は一貫して身近な動物軽視の姿勢に抗ってきた。「国民的動物園」という用語も初めて知ったが、上野動物園がかつて国立動物園であり、今は「国民的動物園」を目指すなら、このような身近な動物の飼育繁殖は重要な使命である。

以前、上野以外の動物園関係者が、「奴らは、何かと恩賜という接頭語を付け、俺たちと差別化をする」と云うのを耳にしたことがある。本書で、東北地方から修学旅行で来た生徒が、「上野動物園で（こそ）ライオンが観たい！」という希望が紹介されて

いたが、確かに、地方に居住する評者はこの生徒の気持ちはよく理解できるが、このような特別感（これが恩賜云々のような嫉妬感に繋がるのだろうか）を満足させる場も「国民的動物園」の役目である。このように身近な種や定番の種を飼育し、加えて、国外の希少種繁殖も行うなど動物園人はかくの如く、とにかく忙しいことをあらためて実感できた作品であった。